

<p>1. 事業細目：セタンジミ増殖技術開発事業費</p> <p>2. 研究名：松原試験漁場における放流試験について</p> <p>3. 研究期間：昭和63年度～平成4年度</p>	<p>予算額 12,000千円</p> <p>予算区分 国補</p> <p>4. 担当者：橋本、井戸本、千葉</p>
<p>5. 目的</p> <p>松原中間育成場に、親貝、D型仔貝、O<sup>+</sup>稚貝を放流し、その成長、生残、分散等を検討し、放流</p>	<p>効果算定の基礎資料とする。</p>
<p>6. 方法</p> <p>1. 昭和63年6月28日にD型仔貝350万個（殻長約0.2mm）、11月29日に親貝780kg、12月20日にO<sup>+</sup>稚貝（殻長約0.8mm）30万個を、試験漁場に区域を定めて、放流した。</p> <p>昭和63年5月31日、10月21日、平成元年8月23日の計3回、潜水調査を実施した。</p> <p>採集方法は、50cm×50cmのコデラートを調査地点ごとに、船上から無作為に投下し、湖底土約10cmの深さまで採泥した。採集は1調査点2回とした。</p>	<p>2. 平成元年10月25日に、試験漁場内15ヶ所、漁場外14ヶ所、計29ヶ所潜水ワク取り調査を実施した。採集方法は、上記1と同方法である。</p>
<p>7. 結果の概要</p> <p>1. 放流前の昭和63年5月31日に、潜水ワク取り調査をした結果、殻長4.94～11.96mmの稚貝が平均約1.5個/㎡採集され、10月21日の調査では、殻長3.84～11.94mmの稚貝が平均4個/㎡採集された。</p> <p>すべての放流が終了した平成元年8月23日の調査では、殻長3.47～9.47mmの稚貝が平均10個/㎡採集され、同時に行った天然域では、殻長4.19～9.63mmの稚貝が平均2個/㎡採集された。</p> <p>親貝放流区では採集されず、D型仔貝放流区では殻長4.64mmの稚貝が2個/㎡と、採集個体数は少なかった。ただし、O<sup>+</sup>稚貝放流区では、殻長3.47～6.70mmの稚貝が24個/㎡と、他よりかなり多い個体数が採集された。</p> <p>このような原因は、初期減耗および分散等が考えられるが、親貝放流区に放流された親貝は、放流までの取り扱い方がまずく、潜水調査の結果、かなりの数の死殻が確認された。松原試験漁場周辺の特性を考えると、適切な親貝の取り扱いにより、親貝放流も今後は、放流効果が増大されるように思料される。</p> <p>また、分散等の影響も考えられるが採集個体</p>	<p>数からみるかぎり、松原試験漁場では、D型仔貝で放流するよりも、殻長0.8mmまで飼育したものを放流するほうが、効果があることが示唆された。（図－1、図－2）</p> <p>2. 図－3に、試験漁場内および周辺のセタンジミの分布を示した。</p> <p>O<sup>+</sup>稚貝放流区の区域が58個/㎡と、前述したように他に比較して多い値を示した。</p> <p>また漁場区域外も中心からW、SW方向に36個/㎡、32個/㎡と、かなりの数の稚貝が採集された。E、NEの生息密度からも、松原漁場は、WからSWに分散する傾向がみられる。</p>

8. 主要成果の具体的数値

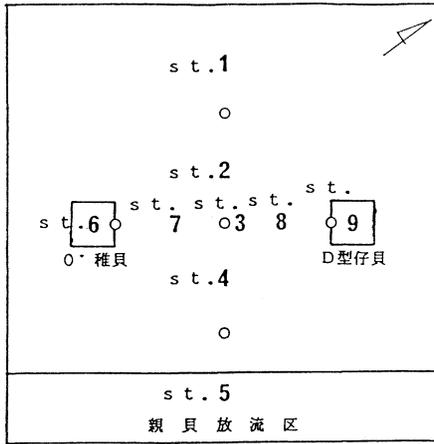


図1 松原試験区採集調査地点

調査年月日：平成元年10月25日

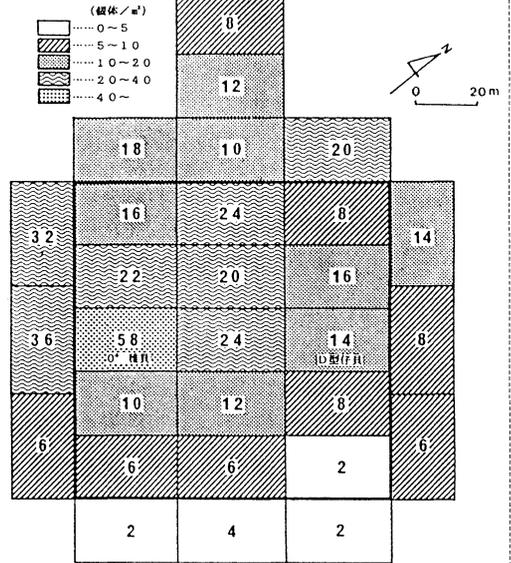


図3 松原試験漁場および周辺のセタンジミ稚貝の分布

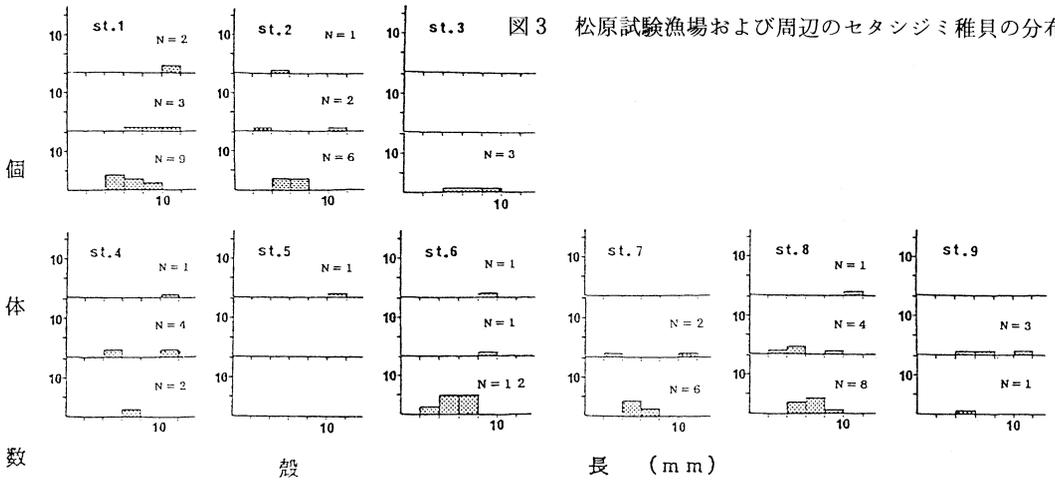


図2 松原試験区セタンジミ地点別殻長組成

松原試験区調査年月日

昭和63年 5月31日 (図1 1 上段)  
 昭和63年 10月21日 ( 中 段)  
 平成元年 8月23日 ( 下 段)

9. 今後の問題点

放流貝の成長、生残、分散等の概略は主旨把握できたが、今後も追跡調査を継続する必要がある。またより厳密なデータを収集するためには、D型

仔貝、および稚貝の標識方法を検討する必要がある。

10. 次年度の具体的計画

標識方法の検討および食害の検討